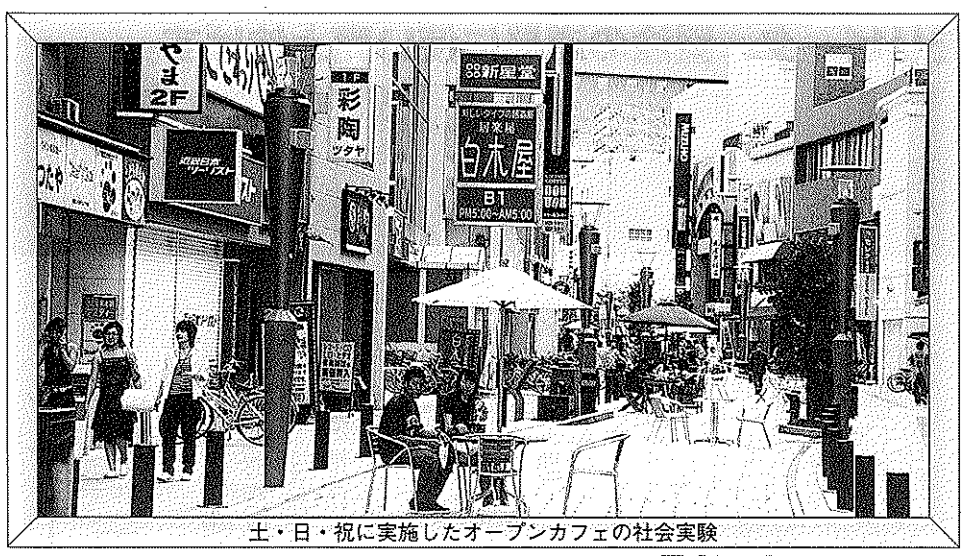
街の活力は自立と創造から

あのまちこの街

No. 128

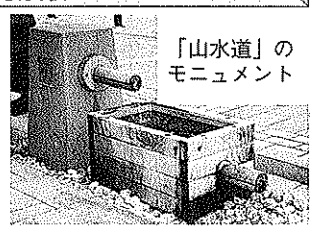
■編　集■ 北海道商店街振興組合連合会
〔あのまちこの街 編集委員会〕
札幌市中央区北１条西２丁目



土・日・祝に実施したオープンカフェの社会実験

郡山市中央商店街

振興組合（福島県郡山市）


「山水道」のモニュメント

郡山市は、人口約三十四万人、福島県第二位で、増加傾向にある。東北新幹線で東京から一時間半ほど。福島空港（新千歳空港から一日三便）からバスで約四十分。

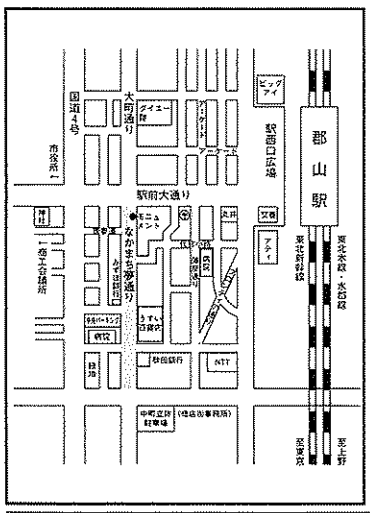
郡山駅西口は、十三年春に再開発事業が完成し、巨大な再開発ビルがそびえる。

今回取り上げる「なかまち夢通り」は、郡山駅から徒歩三分ほど。十五年に産業再生機構の支援第一号として発表された「うすい百貨店」はこの商店街の最大の店舗である。

商店街は、歩行者数激減の中、TMO構想の進展とも連動し、再生を賭けたモール化事業に挑んだ。動き出してから数年、現在に至るまで、事務局は息をつく間もない多忙を極めている。

ハード事業において細部まで徹底的にこだわった一つの事例として紹介する。

名　称　郡山市中央商店街振興組合
設　立　昭和三十九年（任意会は昭和二十五年）
所在地　福島県郡山市中町十五―二十二
電　話　〇二四―九二二―八三八
理事長　齊藤久之丞氏（不動産業経営）
組合員数　正会員約七十名
ホームページ　（再設置準備中）



創意をつくしたモール化事業

TMO構想ともリンクして「エレガントでダンディーな街」へ

歩行者数激減の危機の中 舗道整備でイメージ一新

変貌する旧奥州街道

中央商店街の通りは、かつては奥州街道の一部であった。戦後、現在の国道四号線が開通して以後は、いわゆる旧道ということになる。江戸期には宿場町として繁栄、明治以降は木造二階建の商家が立ち並んだ。大正から戦後にかけ、近代建築化が進み、それまで統一されていた景観が崩壊したという。

昭和三十年代から四十年代は、現在とは比較にならない立錐の余地もないような人通りがあったというが、その間も車社会の到来と郊外店の進出が徐々に進み、衰退の影が忍び寄っていた。平成

「道路元標」のモニュメントと解説板、ユニークなベンチ

に入ると、通行量の激減という目に見える形で現れてきた。

平成四年から五年にかけ、商店街は市や商工会議所の参加も得て道路整備につき検討を行ったが、このときは機が熟さなかった。用地買収の困難さがネックになった。その後、先に周辺の路地整備が進行する。

本格的に動き出したのは平成十年。地価下落（それでも県内で最も地価の高い地区ではあるが）で用地買収の目途が立ってきた。翌年より、県道であることから、県が用地買収を開始。セットバックにより幅員を九メートルから十二メートルに拡幅。十四年までに電線地中化や車道整備が進められた。

モール化のコンセプト

来街者減少の中で特に中・高齢者が相対的に目立つ状況に。うすい百貨店が東北最大級のデパートとして十一年に再生オープンした後は四十代までの女性層、熟年夫婦等が目立ってきたという。

一方、郡山商工会議所を中心にTMO構想の策定が進んでいた。対象エリアの中で、広域商業拠点ゾーンと位置づけられた「中央ゾーン」、その中をさらに四つに区分する「4核構想」において、中央商店街のある「中町核」は郡山のメイン商業地として充実・強化を図るものとされた。

このような状況の中、商店街は「モール化検討委員会」で協議を重ねた。

委員会には市や商工会議所も毎回参加。その結果基本コンセプトが合意され、「エレガントでダンディーな街」を目指すこととされた。

十四年一月、TMO構想が認定され、商工会議所が郡山のTMOとなる。

これにより、「郡山市中央商店街道路高質化事業」のリノベーション補助を国に申請。整備区間は商店街とほぼ重なる三百十六メートル。商店街とTMOの二人三脚の作業であった。

「歩車共存」の道路整備

こうして、車道は県、歩道等は商店街が実施主体として整備することとなった。

かつては歩行者専用であったが、地域全体の交通マネジメントの立場から、平日の解除に踏み切った。

整備にあたっての思想は、「歩車共存」。これには「段差をつける」「ジグザグにする」等いくつかの方法が想定された。採用したのは、一つは「狭窄（きょうさく）する車道」。車道がところどころ狭くなっており、速度ダウンを狙っている。

また、「ボラード（安全防護柵）」を設置。柵と言ってもアルミ鋳鉄製の低いポールである。これが歩道と車道を分離。

スピードダウンをねらった「狭窄」

百三十三本中、九十九本はそのまま地下に埋設できるようになっており、歩行者天国にしてイベントを行う際障害にならないようにした。焦げ茶色は通りに合うという。段差を設けずに済んだため、イベント時に歩道と車道を連続して使用できる。

舗装には淡い桜色の御影石を使用。耐久性や高級感にこだわった。

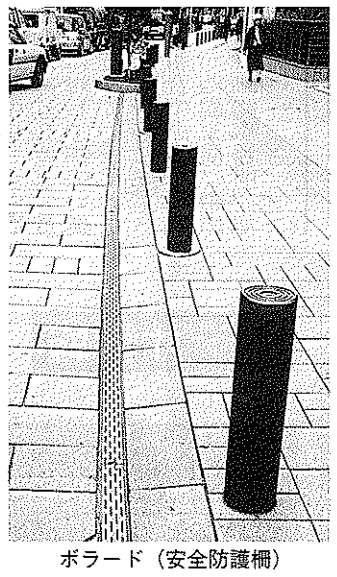
舗石に、イベントの時期も含め、年間を通じてイベントを開催。その経験の蓄積もハード整備に活かされた。

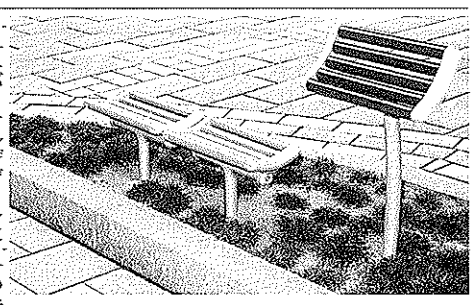
中心市街地では、十六年度よりオープンカフェ社会実験事業「郡山にぎわい・夢カフェ」を実施。本年は約三カ月間、ほぼ毎土日、様々なイベントを開催している。

その主要な舞台となっているのが、なかまち夢通り。TMOの事業であるが、商店街も参加する。七月の開会式と同時に「サマーフェスタinなかまち夢通り」を開催。

また八月の「花市」は中央商店街が従来から行っていたもの。

これらのイベントでも特に音楽を多用。また、まちのコンセプトとの整合性を慎重に配慮し、例えば安売りの類は行わせないという。


ボラード（安全防護柵）


ユニバーサルデザインに配慮したというベンチ

「サウンドストリート」

街路灯は、エレガントな女性をイメージしたデザインとした。灯具を季節によって暖色系と白色系に切り替える。街路灯には防水式のスピーカーを埋め込んだ。「音の景観作り」を目指す「サウンドストリート構想」の具体化として、イベント時ばかりでなく常時音楽を流す。これは郡山が音楽の盛んなまちであることにも対応する。

歴史を偲ばせるモニュメントを二つ並べた。「山水道」は、かつて商家が高台から引き込んだ上水道を再現したもの。「道路元標」は、江戸期から最近まであったものを再現。

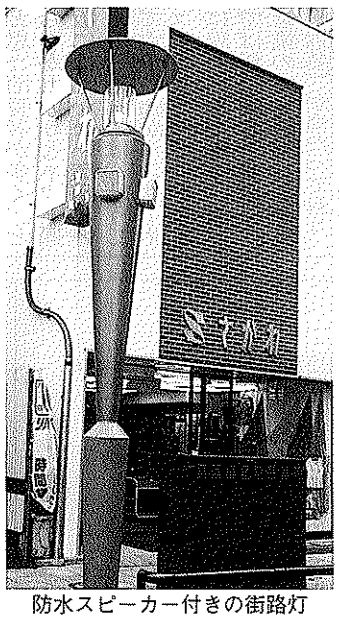
なお、整備の状況はTMOのホームページで整備前との比較写真とともに詳細に紹介されている。（http://www.ko-cci.or.jp/mall/tyuohmall.htm）

公募で「なかまち夢通り」

十六年三月二十一日、竣工式を迎えた。工期は半年ほどであった。

愛称「なかまち夢通り」は、一般公募により決定したもの。募集チラシは小学生にも配布した。

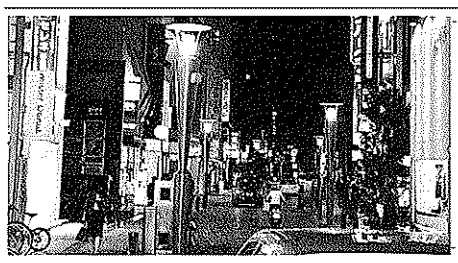
整備の成果はどうであったか。十六年は猛暑により中心市街地全体の通行量が激減した中で、対前年比で休日百四十一％、平日百十四％を記録。最盛期には遠く及ばないが、最低だった十三年と比較すれば、明らかに回復を果たしている。


防水スピーカー付きの街路灯

夢と活気みなぎるまちを

最後に、商店街が定めた「まちづくり憲章」を全文紹介する。

「わたしたち郡山市中央商店街人は、いつも商店街を愛し、▼ひとつ、郡山市の発展の源であることを誇りとし、文化の高いまちをつくります。▼ひとつ、訪れるすべての人にやさしい、安全で快適で楽しいまちをつくります。▼ひとつ、お互いに助け合い、信頼しあい、働く喜びに満ちたまちをつくります。▼ひとつ、新鮮さを求め、質の高い空間と、夢と活気みなぎるまちをつくります。▼ひとつ、美化と啓発に努め、共に美しいまちをつくります。」


街路灯は夏場は白色系

オープンカフェ実施中の祝日・左の街路樹はうすい百貨店前のもの